

関西菌類談話会会報

2009年1月 No. 27

(本郷次雄先生追悼集)

目 次

表 紙	1
本郷次雄先生を悼む	横山 和正 2
本郷次雄先生の思い出と“ヤギタケ”	鷺海 量一 4
本郷先生との思い出	岡田 明彦 5
本郷次雄先生の思い出	衣川堅二郎 7
本郷次雄先生の思い出	近安 和雄 8
夕討ち朝駆け	相良 直彦 10
本郷次雄先生との出会い	沖野登美雄 10
本郷次雄先生を偲ぶーマツカサツエタケの教訓ー	萩 本 宏 12
本郷先生へ	吉見 一子 15
本郷先生の思い出	村上 康明 16
本郷先生を偲んで	川上 嘉章 19
本郷先生との出会いと「私のきのこ中毒」	上田 俊穂 21
本郷先生と過ごした時間	小林 久泰 24
学生時代から一生の師である本郷先生	西田富士夫 25
本郷先生との出会い	橋 屋 誠 27
本郷先生の教育法	伊沢 正名 28
『日本のきのこ』 誕生日前夜と本郷次雄先生	香川 長生 29
本郷先生との出会い	山手万知子 30
恩師本郷先生を偲んで	長澤 栄史 31
編集後記	衣田 雅人 32

本郷次雄先生を悼む

本郷 次雄 博士 (1923～2007)

横山 和 正

本郷次雄先生はかねてからご病氣静養中のところ、2007年4月2日に永眠されました。83歳でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。

先生は1923年(大正12)12月1日に滋賀県大津市にお生まれになり、1941年(昭和16)3月に滋賀県立膳所中学校(現、膳所高校)を卒業されました。同年4月に広島高等師範学校理科第3部に入学され、1943年(昭和18)9月に3年修了、同年10月に広島文理大学生物科に入学され、1946年(昭和21)9月に同大学を卒業されました。この時期は第二次世界大戦の混乱期で、3年で卒業という変則的なものであったようです。戦後は郷里の大津に帰ってこられ、1946年(昭和21)5月から滋賀県立膳所中学校の非常勤講師、同年10月から膳所中学校教諭、1948年(昭和23)4月から県立膳所高等学校教諭として勤務されました。1951年(昭和26)4月から滋賀大学学芸学部の助手になられました。

1954(昭和29)年7月に講師に、1959(昭和34)年12月には助教授に昇格され、1966(昭和41)年4月に教授とされました。その後、三重大学農学部、琉球大学理工学部、琉球大学農学部、奈良教育大学教育学部の講師も兼任されました。また、1985(昭和60)年4月から2年間滋賀大学教育学部付属小学校校長も兼任されました。1989(平成元年)年4月に定年退職され、滋賀大学名誉教授とされました。

広島文理科大学の時代には宮島や広島市近郊でよく植物採集をされ、それと同時にきのこの採集やスケッチもされています。1950年に植物分類・地理14巻2号に最初の論文ともいえる近江及び山城産高等菌類と題して第1報を発表されました。その後、調査地は日本全土におよび、その成果は毎年学部の紀要などに発表されています。収集された標本を主としてシンガーの体系により整理し、一部修正を加えるなどして日本産のハラタ



ケ目菌類をまとめ、1961年に京都大学から理学博士の学位を取得されました。

その後、研究のフィールドは、マツタケを求めてアルジェリア(1970)に、また、国立科学博物館の組織した海外学術調査隊の一員としてパプアニューギニア(1971-72)にと広がりました。近隣の諸国には何度も出かけられ、菌類の調査と、菌学者との交流や育成に努められました。韓国(1973, 1975, 1978, 1990)や中国(1981, 1995, 1996, 1998)、台湾(1982, 1984)などです。アラスカ(1976)及びアメリカ東部(1977)やシベリア(1979)の菌類の調査にも出かけられました。さらに、南半球においては、1987年にニュージーランド及びタスマニア(オーストラリア)を、1992年にはニュージーランドの菌類調査を行われました。

先生はハラタケ目菌類の分類と地理的分布の研究を一貫して行ってこられました。先生の発表された新種や新組み合わせは、国内外をあわせ215種にのびります。

イギリス菌学会、アメリカ菌学会、植物分類地

理学会（現、植物分類学会）、及び日本菌学会に所属し、日本菌学会の創立に立ちあわれ、評議員や理事をつとめられました。1979年5月には日本菌学会第23回大会を滋賀県青年会館を会場にして開催されました。1987年4月には日本菌学会の会長に就任され、1989年3月まで会長を務められました。発酵研究所、菌草研究所などにも関係され、菌学の発展に尽くされました。

1977年アメリカのフロリダ州タンパ市で開催された第2回国際菌学会議で日本のきのこの地理的分布に関して発表されました。日本のハラタケ類は、9つの構成要素があり、北米の東部や西部のものと共通種があるとの発表に、特にアメリカの若い菌学者から多くの質問があり、日本や東アジアのきのこの注目が集まりました。その後、アメリカ、イギリス、中国、スイスなどから多くの菌学者が研究室を訪問し、韓国、タイなどのアジアからの研究者も訪れ、交流を深められました。

先生のこれらの業績に対し、1999年に日本菌学会の名誉会員に、2003年にはアメリカ菌学会の名誉会員に推薦されました。また南方熊楠賞(2003)を受賞されました。

標本は国立科学博物館と菌草研究所の2カ所に寄贈され、保管されています。

また、ご退職時に代表的な論文を自ら選ばれ、生物学研究室から「本郷次雄博士論文選集」(1989)として出版されました。

長年にわたって集積された数千枚のきのこのスケッチを使って、今関先生と共著の「原色日本菌類図鑑」(正・続2冊)をはじめ、合計9冊の図鑑を出版されました。

ご退職後は、中国など海外の菌類の調査を継続して行うとともに、日本各地のきのこの同好会にかけ、各地のアマチュアの指導や、菌類教育の普及に力を注がれました。また、ご自宅を年に3回ほど、Hongos会(ホンゴスカイ)と称して、きのこの研究者を招き、きのこの談話を楽しみました。全国からアマチュアを含め多くのきのこの愛好者が出席しました。Hongos(オンゴス)とはスペイン語できのこ・菌類のことで、大変ふさわしい名称と思います。

晩年に「きのこの細道」(トンボ出版)を出版

されました。そのあとがきに「私のきのこの本格的なお付き合いはもう50余年、その間アカデミックな研究を続けてきたというよりは、むしろ趣味で好きなことをしてきたと思っている」とお書きになっています。

浮世絵がお好きで、それを模写していると言われておられ、お宅にも絵がかざってありました。

先生はかざらないご性格で、お酒がはいると、とても愉快地に歓談されました。各地のきのこの会からの依頼も気軽に応じられ、九州から北海道まできのこを求めて出かけられました。

先生の大学での日常は、出勤される前に小型の車で大学の近くのお寺や神社の境内に立ち寄り、きのこを採集して、大学にもって来られ、スケッチされました。大学の南の田上山の山麓の小さな道もよくご存じで、このようにして社寺林の照葉樹林に発生する多くのきのこを記載し、世界に紹介されました。きのこの少ない季節には、顕微鏡観察とスケッチの整理をされていました。

私が大学院の時には、京大芦生演習林での採集会にも何度もご一緒しましたが、今関六也先生、椿啓介先生、浜田稔先生などと長治谷小屋の廊下に置かれた長い机の椅子に座って歓談しながら、夜を徹してきのこをランプの熱で乾燥しました。電気のない、ランプでの生活を体験しました。本郷先生は夜2時頃までランプのもとでスケッチをされました。夜につけた色は若干違うのでといわれて、朝起きて色合いを修正されました。1つのきのこを書き上げるのに2時間くらい、複雑な構造のものは4~6時間。対象にきびしく向き合っただけで、このようにして新しい種を記録していかれました。

今のようにコピー機のない時代ですから、ラテン語の記載も京大の植物病理学の赤井教授の研究室に通って、手で書き写されました。ラテン記載も書き写している間に暗記してしまいましたと言われ、採ってきたきのこをながめながら、ラテン語で特徴をすらすらと言われたこともありました。

細い毛筆で微細なところまで正確に描かれたスケッチをもとにして作られた図鑑は、きのこを勉強するものにとってはなくてはならないもので

す。アメリカや韓国などからも図鑑の記載文（日本語）のこの部分を訳してくれないかと依頼が私のもとにも何度もきました。

写真を用いた図鑑としては「日本のきのこ」（山と溪谷社）を、退職される直前の1988年に出版されました。伊沢正名氏のみごとな写真と香川長生氏の行き届いた編集により、日本のみならず海外でもよく利用されています。毎年増刷をかさね、ほぼ10年後の1997年には13刷となり、この図鑑の出版を契機に日本のきのこ愛好者が、急増したように思います。また、きのこ研究の気運も盛り上がってきたように思います。

戦後の混乱期に研究をはじめられ、研究室を整備しながら、多くの人材を教育界や学会に送り出

されました。

戦後の設備や文献の乏しい中でも、ご自身の研究を一貫して進められ、日本の高等菌類の多様性を海外に紹介されました。

琵琶湖岸に近い田園地帯にあるご自宅の広い庭が、各地のきのこ会からの会員の方々や近隣の多くの人々でいっぱいになり、桜がほころび始めた少し肌寒い日でしたが、大勢の人々に見送られて、旅立たれました。ご法名は「観察院釈遊学」です。ご冥福をお祈りいたします。

（本原稿は日本菌学会から許可を得て、2007年12月発行の日本菌学会報第48巻第2号から転載しました。）

本郷次雄先生の思い出と“ヤギタケ”

鴛 海 量 一

小生、きのこに関しては素人ですが、愛好家でもあります。終戦後の少年期、疎開先の筑波山麓にて父親に伴われて、アマタケ、ハツタケ、アカハツや芝栗など食料として調達したのが始まりです。定年後は、きのこシーズンには毎週のように比良山系や伊賀上野方面に出かけています。今までに自ら採取して食したきのこは約60種、関西圏では新しく出会うきのこは、年に1～3種で限られます。教本は山溪の「日本のきのこ」と「きのこ（Field Book）」です。本郷先生が南方熊楠賞（2003年）を受賞される前年と前々年、比良山系で“ヤギタケ”の群落を見つけました。前々年

は調理をしましたが、きのこがあまりに収縮するので気味悪くなり、味が美味なることだけを確認して不食です。そして翌年も“ヤギタケ”を採取、某先生に2～3度電話するも不在、意を決して大御所本郷先生に電話では失礼とは思いつつ自宅に電話すると、やさしく温和に“白いヒダと黒色の柄の境目が明瞭なのが特徴です”とお教えいただき、やっと2年越しでその美味なきのこを食することが出来ました。“ヤギタケ”は本郷先生の思い出です。

（2008年6月4日受付）

本郷先生との思い出

岡田明彦

私は昭和30年4月滋賀大学学芸学部に入學、生物研究室に入った。当時、木造の新しい平津校舎には物理・化学・生物・地学・家庭の研究室、教官室や教室があった（現在では鉄筋のビルに建て替えられている）。指導教官になっていた本郷先生は膳所高等学校教諭から滋賀大学学芸学部常勤講師となられてまもないときであり、若々しくてはつらつとしておられた。若くて頭がよく禿げ上がっているなど思っていた、現在では自分も先生に負けないくらい禿げ上がっているが…。

先生に実習では植物の野外観察によく連れていってもらったものである。自分の小・中・高校生の時は、実験実習というと室内が常であって野外実習は全くなかったので新鮮に感じ、楽しかった。

生来、私は山や湖に出かけることが好きであった。自宅がびわ湖に近いこともあり、子供の頃から魚つかみが好きで、小学校からの帰り道の小川でホンモロコを手づかみして、ヤナギの枝に顎から口へさし並べてよく帰ったものである。母が泥で汚れた学生服を見て、お父さんが戦死していないので、幾ら言っても私の言うことは聞いてくれないと泣かれたものであった。

キノコについては、母の実家の山によくマツタケ、ホンシメジ、イクチ、クロカワを取りに行った子供の頃の楽しい思い出がある。母の実家が本郷先生と同じ大津市瀬田南大萱町であったため親しめ、先生には初対面の時から親しくしていた。

先生は研究室でいつもキノコのスケッチ、顕微鏡観察、文献と取り組んでおられ、私が訪れると笑顔で迎えてくださった。教官会議等の会議には欠席されることが多かったようであった。キノコの採集が学会等を除き留守のことはほとんどなく、管理職への野心はなさそうで、高度経済成

長が始まっていた時期、どこ吹く風という感じであった。

研究室の仲間では、先生を親しみを込めてホギラスと呼んでいた。一方、自分とは言えば恵まれた研究環境に置いてもらったのにもかかわらず、血気盛んというか女性が多い膳所にあった音楽研究室によく行き、ピアノや声楽の単位を取ったり、大津管弦楽団でコントラバスをやったりと浮気根性が強かった。しかし、先生からは叱られたことはなかった。先生は自分の後ろ姿を見て学びなさいとおっしゃっていたようだ。また、研究室で学生が雑談をするなかにも入ってこられ、女性についての話にも笑顔で乗ってこられた。

朝から裏山にキノコの採集。研究室に帰って保育社の原色日本菌類図鑑で調べて、先生に同定してもらった後スケッチ。胞子やシスチジアの顕微鏡観察と地味な活動が続いた。キノコのスケッチや光学顕微鏡でみた胞子・シスチジアの形態を時間をかけてスケッチしたものは後に役立ったものであった。

先生の教官室は二階、我々の研究室は一階。階段横の暗室で撮影してきたキノコの写真等のモノクロフィルムを現像してから、引き伸ばし機で引き伸ばして現像、定着するという過程を楽しんでいた。それらの作品は日の日を見ることはほとんどなかった。

私はキノコの分類の研究には、各地の山や林に行くべきだと考えたものであるが、本郷先生が近くの山で次々と新しいキノコを採集され、研究されているのを目の当たりにして、遠くに行かなくても足下に幾らでも研究材料が転がっているということを示してくださっていると感じた。先生と一緒に採集に出かけたとき、未知のテングタケ科やベニタケ科のキノコ等、猛毒キノコかもしれないのに臭いをかいでどれもかまわず少しかじって味を調べられた。「大丈夫ですか」と尋ねると「あ

とはき出しておけば大丈夫」とおっしゃっておられたことが印象的である。私の卒業論文は「アカマツ山のキノコ〜ハラタケ目〜」ということで大学の裏山を年間を通じて歩いた記録を中心にしたものであった。

私が教員生活に入って4年目、滋賀県より週2日の内地留学を認めてもらった。好きな大学で好きなテーマで勉強しなさいということだった。やはり本郷先生のおられる滋賀大学に行き、本郷先生の指導で「三上山のキノコ」というテーマで一年間勉強させてもらった。

本郷先生のご紹介で学生時代に日本菌学会への加入、50年余会費を払い続けた。そこでは学会の雰囲気を知り、研究の実態・研究のあり方を学ばせていただいた。芦生演習林での日本菌学会のフォーレでは、昼間の採集それに続く同定会、夕食後の酒を飲み交わしての座談会、浜田先生、本郷先生、椿先生の話から学ぶ所が多かった。それぞれキノコの専門家が情報交換し、フランクに議論される内容は、講義や学会発表にはない奥が深く親しめる内容のものであった。

関西菌類談話会では浜田先生との出会い。キノコ採集にいつも同じ籠をぶら下げておられた姿、マツタケの人工栽培に情熱を傾注しておられた。本郷先生は浜田先生と親しく、浜田先生の情報をもとにしてマツタケの近縁種を新種として記載されたこともあった。真田先生、四手井先生の奥さん、上田先生との出会い等々懐かしい。

高校で生物担当教員であった時には、実験実習と野外観察を多く取り入れ、生態系の学習ではキノコが分解者で陰の主角として重要な役割を果たしていることを理解させるため、生徒に興味ある教材を提示できた。私は小・中・高等学校の教諭と年を重ね、主任、教頭、教育委員会、教育センター、高校長とそれぞれの課題に取り組み、情熱をそそいできたつもりである。

キノコの研究をするのに良い環境に恵まれていながら、キノコからいつの間にか離れてしまっていたことは残念であったと思っている。しかし、本郷先生の研究姿勢に学ぶところがいつまでも生きているものと感謝している。

(2008年8月18日受付)



三井寺でのキノコ採集(半世紀前)

本郷次雄先生の思い出

衣川 堅 二 郎

「時間の短さ」や「人生が呆気なく過ぎ去ること」に気が付くと、今ごろ分かったかという残念さとともに、その感慨は自分の意識の中に秘め、外に出すことは恥かしい。しかし故人への惜別の情にはこの感慨が常に背景にある。感慨の一部分でも共有する人と互いに親しかった故人の思い出を昔語りする。これは、非常に個人的であると共に、魅せられもする。

それは、私が学部（旧制）学生の2回生か3回生の時だったから、昭和26年か27年のことだったと思う。当時、植物病理学の研究室へ月に何度かきて、いつも古めかしい大型の本を黙々と読んでおられる方があった。本は有名なヨーロッパの菌類分類図鑑であった。詳細は忘れてしまったが、丁度、私の属していた研究室でキノコが話題に上がったからであろう、浜田稔先生が、私を連れて行ってその方に紹介して下さった。それが本郷次雄先生のお若いときであった。それから時々、先生は吉田山や大文字山（だいもんじやま、如意が嶽？）の山麓へ、キノコ観察に他の2、3人と一緒に連れて行って下さった。キツネタケ、オオベニタケ、ドクベニタケなどからその時に覚え、後者2種の分類は怪しいのだなど吃驚するような現状まで、まるで何も知らなかった私に菌類世界の扉を開いて下さった。キノコを集めてきて先生にお見せすると、別の種類かと思っていたものが同種であったり、同種と思っていたものが別種であったり、まだ分類できていない種類であったり、「類をもって集まる」の「類」は始めから名札を付けたものでないことを実感し、生命の核心にはなんと奥深い不可知のものが潜んでいるのかと感じ入ったのである。

その頃、「小麦の祖先」研究の木原均先生が「実験遺伝学」を講じておられた。しかし、大忙しの

先生で、講義は割り当て年に2度か3度しか開かれなかった。けれど、「生命は遺伝と環境の両者で決まる」と環境を強調され、感銘をうけたことを覚えている。学生は、書物（今から思えば、利用できるものは貧弱であった）の中から結構「遺伝」というものの概要を自分のものにしていて、友人とはよく議論した。知らないことを聞かされ、いつか生命を遺伝学的に考えるようになっていた。

私自身にとっては新しい見地からの疑問を、ときどき、本郷先生にもお尋ねした。先生にはご迷惑であったと思っている。先生は何時も寛容に真面目に対応してくださった。キノコの多様性は、遺伝的支配からも環境に対する反応からも表現されるのであって、それ全体が生物としての種を規定している。表現の内容は直ぐ判るものではない。だから、先生のお心は「分類学者は、できるだけ多くの標本を多くの環境からあつめ、そこに現れている形質を丁寧に調べ、「種」の特徴として共通で恒常的に発現される形質を探し出し、記載する」という現実的な研究法に忠実であろうと心掛けられたのであろう。深い洞察を伴ったお考えであったが、よくは分らなかったし、推察は失礼である。私はやがて大阪府立大学へ赴任し、お教えいただく機会が減ってしまった。年月はあつという間に過ぎ去り、お付き合いの浅かったことは残念である。

年月は短かったが、思い出はたくさんある。しかしそれは他の方々にご紹介下さると思う。私の人生の始まりに一方ならずお世話になった本郷先生に心から御礼を申し上げ、ご冥福をお祈りします。

平成20年9月14日
(2008年9月17日受付)

本郷次雄先生の思い出

近 安 和 雄

今から58年くらい前、高知県と愛媛県の県境近くの県立中村高校津大分校（現在の西土佐分校）に赴任したとき、周辺は山又山で自然がいっぱい。周りの自然を対象にした研究では、当時コケやシダについては県内で有名な研究者がおり、ほとんど研究され尽くしている。人のやっていることを後からやっても面白くないと考え、高等植物では世界的な植物学者 牧野富太郎博士がいるが、牧野植物図鑑を見ると、厚い図鑑の中で、キノコは後部にほんの少ししか載っていない。そこで、牧野さんですら少ししか研究していないので、キノコを研究しようと考えました。しかし、高知県内では、キノコの指導をして下さる先生がいない。当時、キノコの図鑑としては、保育社の原色日本菌類図鑑しか店頭になく、その著者である当時、滋賀大学の講師をされていた本郷先生にご指導を受けようと心に決め、誰の紹介状も持たず、直接大学に先生をお訪ねすることにした。

昭和33年の夏、国鉄石山駅で下車し、バスに乗り、しばらくして「大学前」で下車。（50年前のことで記憶が定かではないが）当時、バスの停車場にはバスの時刻表を貼った掲示板のみが立っているだけで、周辺の東側はすぐ瀬田川が流れており、西側一面は田んぼのみであった。田んぼの中の一本の坂道を東に上がっていくと農家が転々とあり、その間を歩いていくとその先に大学があった。

先生の研究室は、二階の端の少し広い部屋で、他に2人の若い先生がおられました。部屋の中は棚が多く、その大部分は図書とキノコの標本でいっぱいであり、先生の机の引き出しの中もキノコの乾燥標本でぎっしり詰まっていた。そこで、先生はキノコについていろいろのお話をして下さり、高等植物に比べて菌類の研究は世界的にも大分遅れており、世界の中でも日本は更に遅れている。日本の中でも高知県には、菌類研究者が居ら

ず、キノコの未開発地区であるので、大いに頑張って研究してくれるよう励まして下さいました。また、キノコの研究方法について、胞子や組織の細胞、シスチジア等の観察の仕方、キノコの同定方法など親切にいろいろと教えて下さいましたが、特に何度も強調されたのは「キノコの原色同大図を描きなさい」ということでした。絵を描くことが苦手だった私は、最初は1つのキノコを描くのに3時間も4時間もかけて描きましたが、それでも自分が気に入った絵を描くことができませんでしたが、何年か描いている間に少しはましな絵が描けるようになり、自分も本郷先生のように、将来いつの口にか自分で描いたキノコの絵で高知県のキノコ図鑑を作ろうと心ひそかに思ったことでした。

いろいろお話を聞いていて大分遅くなったので、もうおいとましようとする。「もう遅くなって、高知まで今日中には帰れないでしょうから、私の家に泊まっていきなさい」と言って下さったので、お言葉に甘えて先生のお車に同乗させてもらって、先生のお宅にお邪魔しました。当時、先生のお家には南から入っていったと記憶している。そして、母屋を新築したばかりで、周りに幕が張ってあった。その横に独立したお風呂場があり、入らせてもらい、そのあと、当時小学生ぐらいのお嬢さんと息子さんがおられ、裏の川の上手の道を案内して下さい、3人で散歩しました。もうお二人ともいいお年になり、それぞれお元氣で活躍のことと思います。

「来年も夏休みに来なさい」というお言葉と「夏だったら学生寮が空いているし、食堂も利用できる」とのことで、翌年の8月に2～3泊の予定で行ったところ、ちょうどこの頃、寮も食堂もお盆休みで、また先生宅でお世話になってしまい、とくに奥様には何かとご面倒をおかけして、大変申し訳なく思っております。翌々年も夏休みにお邪

魔して、またどうした訳か先生宅で2泊ぐらいお世話になりました。先生と奥様にはなんとお礼を申し上げたらよいか分かりません。遅ればせながら、厚くお礼を申し上げます。

本郷先生について忘れられないことは2点、それは素晴らしいキノコの原色の写生図を手早く描くこととお酒が好きなことです。先生とは京都大学の芦生演習林、鳥取県の大山や奈良県の大台ヶ原などに度々ご一緒させていただきましたが、大体午前中はキノコの採集で、午後はキノコの整理とスケッチ、夜は私たち若い者はキノコの乾燥を夜遅くまで行なった。現在はどのような方法でキノコを乾燥しているかわからないが、当時は石油缶に2段金網で棚を作り、これにキノコをのせ、下から灯油ランプで加熱し、乾燥するという至って簡易な乾燥器による乾燥法でした。乾燥器の周りに輪になって腰を下ろし、キノコのことやいろいろの話をしながら、キノコの乾燥の番をしました。故人となられた吉見昭一先生もよく私たちと一緒に乾燥の番をしながらいろいろな話をしました。本郷先生は午前中はみんなと一緒にキノコを採集し、午後は時々私達と一緒にキノコのスケッチをされていましたが、横からチラチラ見ていると、その絵の素晴らしさと共に描くスピードに驚きました。私が鉛筆でキノコのスケッチの下書きをまだ終わっていないうちに、先生はもう筆で美しい原色のキノコの絵を完成させているのです。美しいキノコの絵とその描くスピードには感動しました。夜になると、本郷先生は浜田先生等とよくお酒を飲みながら談笑されていました。お酒を飲みながら談笑されている本郷先生の横顔はとても幸せそうな顔で、先生は本当にお酒が好きな方であると思いました。このときの先生の幸せそうな顔と対照的に、思い出される寂しそうな顔とか、つまらなそうな顔として思い出される顔は、平成7年私が「四国のキノコ」という小著を出版するためのスライドのキノコの名前を点検して頂くためにお伺いしたとき、点検終了

後に奥様手料理のおいしい刺身等とお酒が出されたとき、私は酒が飲めないで、おいしい刺身等をご馳走になっていましたが、先生と一緒に飲む相手もなく、一人寂しそうにとか、つまらなそうに飲んでおられた顔を見て、大変申し訳なく思ったことを今思い出しております。

本郷先生のところに留学して、さらにキノコについて勉強したいと考え、先生にお願いしたところ、「まだ、滋賀大学は規模が小さく、留学生を受け入れる体制でないで、京都大学に浜田稔先生というマツタケに詳しい先生がいらっしゃるで、その先生のところに留学しなさい」と浜田先生を紹介して下さい、昭和39年4月から京都大学農学部応用植物学教室に内地留学をしました。京都大学では将来のことを考えて、培養について主に当時大学院の学生であった小川眞さんに指導していただき、暇を見つけてはキノコを採集し、滋賀大学まで行き、本郷先生にキノコの同定方法等についてご指導していただきました。滋賀大では、時々先生や学生さんらと一緒に近くの小山や小さなお宮の林に採集に行き、大学に帰ってからキノコの同定について先生からご指導して頂きました。こうした留学期間は僅か半年間の短い期間ではありましたが、浜田先生や本郷先生をはじめ多くの方々のご指導により、大変有意義な経験をすることができ、関係の皆様方大変感謝しております。なお、滋賀大学名誉教授横山和正氏、千葉大学教授鈴木彰氏、元国立科学博物館職員土居祥兌博士などの方々も当時は大学院の学生さんで、何かとお世話になりました。

今日の自分があるのは、約50年間の長きにわたり、キノコの研究の基礎からいろいろとご指導いただきました本郷先生のおかげであると心から感謝しております。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。
(文中に間違いがあれば、老齢によるものとご容赦ください。高知市瀬戸東町2-167)

(2008年9月18日受付)

夕討ち朝駆け

相 良 直 彦

新聞記者などが取材のために深夜や早朝に相手の家を訪問することを「夜討ち朝駆け」という。夜間やご自宅への訪問こそしなかったが、私は本郷先生に対して夕討ち朝駆けを敢行した。きのこの名前を教えてもらうためである。

きのこの同定は、鮮度の良い実物を見るのが決定度が高い。午後早く調査地から帰れば、その日のうちに先生のところへ持って行く。早く帰れなかったときは、冷蔵庫に保存しておいて翌朝持って行く。先生の都合など構ってはいられない。

朝、先生は「さあ仕事するぞ」と意気高く出校される。そこに私が待ち構えている。先生はげんなりした顔をされる。「事前に連絡くださいませか」と言われたこともある。前夜ご自宅に電話すれば事前連絡にはなるが、それもはばかられたからしなかった。断られても困る。先生の意気を阻喪させ、迷惑をかけていることはわかっていた。しかし、思うに、ここで私がたじろいで遠慮していたら、研究者としてだめだったのだ。本郷先生を犠牲にすることによって私は一人前に(?) なった。

私の師匠・浜田稔先生は、「研究というものは、エゴイスティックにやらなければだめだ」と言っ

ていた。言われるまでもなく、私は十分にそうあった。若い研究者は厚かましくエゴイスティックであってよいと今も思う。それは、学者として立とうとする覚悟とも連動している。われわれ普通の人間、すなわち特に優れた才能を持つわけではない者には、なりふり構っているゆとりはない。心優しい人は研究者・学者には向かないかもしれない。エゴイスティックであった分、のちに世間に対してなんらかの形でお返しすればよいのだ。

また、学者は世間知らずでよいのだと思う。世間通になる暇があったら、それをも学問に向けたらどうか。世間通の学者は少なくともそれだけ私より有能なのだから、さらに学問すればノーベル賞や文化勲章がとれるのではないか。

武者小路実篤 84 歳の色紙に、「勉強勉強勉強勉強のみよく奇跡を生む」というのがある。Mycoscience 誌に掲載された Ai Kaneko・Naohiko Sagara の論文に対して日本菌学会から 2003 年度の平塚賞を授与されたとき、故平塚先生の夫人利子様よりこの色紙を頂戴した。とてもうれしかった。「烈しい心をもってさらに地べたを這え」と私には聞こえる。

(2008年9月25日受付)

本郷次雄先生との出会い

沖 野 登 美 雄

本郷先生と初めてお会いしたのは、昭和 41 年 11 月に、当時の愛媛県林業試験場が委託していた、民間の松林でのマツタケ実験地を視察に来ら

れた時でした。先生とお会いしたのはこの時が初めてですが、私は学生の頃よりきのこに興味があり、指導して頂く先生が居なくて困っていたとこ

ろ、中学の先輩であり、当時広島大学で蘚苔類の勉強をしていた関太郎氏（現広島大学名誉教授）に本郷先生を紹介して頂きました。

それを機会に時々標本を送付して、同定をお願いしていました。ちょうどその頃、日本菌学会が設立され、先生からきのこを勉強するのであれば「一つ日本菌学会に入会しては」とのお誘いを受け、先生の紹介で入会し、現在に至っております。当時採集して同定をお願いしたきのこは、いま思えば何処にでも生える凡布種でありましたが、いつも丁寧に教えて下さいました。そんな訳でしたから、初めてお目にかかった時も、学者と言うよりも、きのこ好きの先生と言う印象を受けました。その後は、日本菌学会の採集会を始め、先生が良くご出席されている関西菌類談話会の採集会にも参加するようになり、先生にお会いする機会が増えました。

これらの観察会で先生に会う度に「ぜひ愛媛でもきのこ観察会を作っては…」と言われておりましたが、その頃は自信が有りませんでした。

平成9年にきのこアドバイザーとなった翌年に、やっと愛媛きのこ観察会を発足させた事を先生に報告しましたところ、「良かった、良かった」と大変に喜んで頂きました。そしてこの時に、会の顧問をお願いしましたら、気持ち良くお引き受け下さったのが印象に残っています。

観察会が発足して3年目の、平成12年8月5日～7日の3日間、石鎚山成就社での宿泊付き観察会に、会として始めて来県してご指導を賜りました。

愛媛県は本州の山と違い、きのこが良く生育する森林は、公共の交通機関からは遠く、この石鎚山へも「R伊予西条駅から登山口まで車で約1時間、そこからロープウェイに乗って下谷（成就駅）で下車、それから成就社宿舎まで約40分と、坂道を登られて、大変にお疲れであった事と思いますが、嫌な顔もしないでにこやかに、振舞われたのが印象に残っています。また、その時の会員の喜びようは忘れられません。

先生も数年間新居浜市に滞在して居たとの事で、最初に石鎚山に参加できた事を大変になつかしがられていたのが、特に印象的でした。

その翌年の平成13年7月27日～29日と、平成14年7月26日～28日の2回は、宿舎まで車で行ける面河溪での観察会を実施して、この会として3回にわたって現地でのご指導を頂きました。

先生が体調を崩されるまでの3年間、この愛媛まで出向かれてご指導をしていただきました。この後も、総会や忘年会にお誘いして、お話を賜りたかったのですが、長旅は少し無理のご様子でした。

今思うと、もう少し早く観察会を立ち上げていたならば、もっともっと先生のご指導を受けることが出来たのになあーと、私は勿論ですが会員達もただただ残念でなりません。（愛媛きのこ観察会）

（2008年9月27日受付）



最初の石鎚山成就社でのきのこについてお話をされている本郷先生。（平成12年8月5日）



第二回目の面河観察会での同定会できのこを手にとり説明されている本郷先生。（平成13年7月27日）

本郷次雄先生を偲ぶーマツカサツエタケの教訓ー

萩本 宏*

私は、1955年4月に大学の3回生になって農林生物学科(4講座構成)に所属した。定員9名に対して11名の応募があり、分属試験を受けたが、木原均先生(H. Winklerが1920年に唱えたゲノム概念の再定義によるゲノム説の提唱、ゲノム分析法の確立、パンコムギの進化の系譜の解明、種無し西瓜の発明などで著名な遺伝学者)のお計らいで全員入れていただいた。同じ科になった守中正氏(後に農水省研究機関の植物病理学者)と昼休みを利用して理学部附属植物園や大文字山にしばしばキノコ採集に出かけた。その採集品が濱田稔先生(応用植物学講座助教授)のお目に留まったのか「本郷君が時々来るから教えてもらえ」と言われた。これが本郷先生のお名前を知った最初であったように思う。

本郷先生は滋賀大学の講師になられた翌年で31歳とお若かったが、私にはキノコの分類学の大先生に思えた。事実、既にわが国を代表する大家であられた。先生は新設の大学では入手できない文献を調べに来ておられた。濱田先生のお部屋にお見えになった時にはわずかな隙間に置かれた椅子に座って濱田先生と話しておられた。先生は静かで、お言葉も少なく、私の分類学者に抱いている心象によく合致した方であった。私は軽い気持ちで同定をお願いしたが、寸暇を惜しんで文献を渉猟しておられた先生には大変ご迷惑をお掛けしたと恥じている。

私は3回生の12月に植物園内でアカマツの毬果に生えているキノコを見つけた。このキノコは松毬に生えることと長い根状の柄があることで、本郷先生に同定をお願いするまでもなく、濱田先生ご所蔵の、出版されたばかりの川村清一先生の『原色日本菌類図鑑(風間書房、1954~1955)

を参照してマツカサツエタケ [*Collybia conigena* (Pers.) Bres.] と容易に同定することができた。私は、このキノコが松毬にしか生えないことから、生活環の完結に必須の特異な物質が松毬に含まれていること、さらにその物質が他のキノコにとっては自分で作れる普遍的なものであることを期待した。併せてマツカサツエタケに特徴的な地下部の根状の柄は屈光性を、地上部の柄は屈地性をもつもので、根状の柄の有無は松毬の上中埋没深度に依存した子実体の成長パターンを示すものと解釈した。

それで、これらの仮説を証明するために、まだ応用植物学講座(慣例により応植と略称)に所属する前であったが、濱田先生に培地組成と分離法を教えていただき、寒天培地で子実体形成を試みた。4回生になって応植に入れていただき、濱田先生のご指示でこの研究を卒業論文用の研究課題にした。ある日、本郷先生にマツカサツエタケの話をしたところ「川村先生の図鑑は間違いです。二つあって・・・」と仰って、紙切れにマツカサキノコモドキ、ニセマツカサシメジとお書きになった。私は和名が二つあると勘違いしたが、英語の卒論には和名は不要なので、*C. conigena* ですませた。1957年3月に卒業して翌月から大学院生になり、濱田先生の部屋に同席させていただいた。その年の秋に濱田先生から「本郷君が図鑑を出したから買わへんか」と勧められて『原色日本菌類図鑑』(保育社、1957. 11.10発行)を11月26日に濱田先生を通じて購入した**。

この図鑑は三つの点で画期的であった。その一つは、Agaricales(この図鑑ではマツタケ目)の分類がR. Singer(1951)の分類体系に則っていたことである。二つ目は、この本の定価は1,200円

* : 連絡先 〒606-8061 京都市左京区修学院宮ノ脇町 20-5

であり（私は著者割引の1,000円で購入）、当時の国立大学の授業料が年間6,000円、国家公務員6級職（現在の1種）の初任給が9,200円であったことを考えると決して安くはなかったが、なんとか手の届く範囲にあったことである。ちなみに、川村先生の図鑑は各巻が1,800円、全8巻では14,400円であった。三つ目は手描きのキノコの図は写真よりも分かりやすく、さらに色彩が川村図鑑よりもはるかによく出ていたことである。この図鑑のお陰でキノコの愛好者は大いに助かり、また、愛好者そのものも増えたことと思う。

私はこの図鑑を手にとりて真っ先にマツカサツエタケを探した。松毬に生えるキノコとしてマツカサキノコモドキ [*Pseudohiatula esculenta* (Fr.) Sing. ssp. pini Sing.] とニセマツカサシメジ [*Baeospora myosura* (Fr.) Sing.] の2種類が掲載されており、マツカサツエタケの名前は括弧付でもなかった。大学院では研究課題を変えてはいたが、卒論は紙くずになってしまった。私は、属まで異なる2種類のキノコの形態的相違を同一種の環境条件に由来する相違と誤解していたのである。一つの滅菌シャーレーに数個の傘を伏せて胞子を採取したうゑに、分離・培養した試験管を混ぜてしまったので、分離に用いた胞子紋は残してあったが判別できなかった。何をおいても、実験材料こそあらかじめ本郷先生に同定していただくべきであったと後悔したが、「倒草再び立たず」である。

川村博士の「日本原色菌類図鑑」と同博士の「原色版日本菌類図鑑」（大地書院、1929）には根状の柄のある子実体とない子実体の図が一緒に載っている。しかし、川村博士が記載されている胞子の大きさは今関・本郷図鑑のニセマツカサシメジの値に近いものである。川村博士は両種を区別しておられたのであうか。他方、不思議に思ったのは極めて特徴的な形のキノコで川村図鑑には載っているマツカサツエタケが今関・本郷図鑑には載っていないことであつた。不掲載の理由をお尋ねする機会を逃してしまつたが、今考えるとこのキノコの分類学的帰属を熟慮されていたのであう。

この苦い経験は後年、除草剤の研究に非常に役に立った。応植は農学部でありながら教授、助教授、講師のいずれもが理学部植物学科のご出身 [E.J.H. コーナー 思い出の昭南博物館（中公新書、1982）に詳述されている郡場寛先生の弟子] で、基礎的な研究をしているところであつた。そのうゑ、米不足時代で農学はイネの研究が本命であり、キノコの研究といえは失笑をかうだけで相手にされなかつた。したがつて、キノコに関わる職を得ることは至難で、濱田先生はご不快のご様子であつたが製薬会社に就職し、1962年6月からほぼ17年間を除草剤の創製研究に携わつた。

わが国の水田には、1970年代になつて“ホタルイ”と称する雑草が急増して大問題になつた。この雑草に効かない除草剤の連用によつて植生が遷移したのである。そこで、有効な除草剤を開発するために、会社の福知山農場でフィールド研究を担当していた岩崎桂三氏が“ホタルイ”を集めた。その収集品は変異が極めて大きく、マツカサツエタケの悪夢がよみがえつた。早速、岩崎氏に標本を作らせて、私の学生時代に応植の教授であられた今村駿一郎先生（本邦カワゴケソウ科植物の発見者、気孔開閉機構研究の先駆者、花芽形成機構の研究者）を介して著名な植物分類学者の大井次三郎博士に同定を依頼していただいた。その結果、標本にはホタルイ、イヌホタルイ、タイワンヤマの3種類が含まれていた。

岩崎氏はその同定結果をうけて3種類の染色体数を決めるとともに、全国の水田に生育するのはほとんどがイヌホタルイで、タイワンヤマは少ないこと、ホタルイは耕作水田には皆無で、休耕田などに稀にみられることを明らかにするとともにその原因を解明した。この成果に対して、京都大学から学位を授与されたうゑに日本雑草学会賞を受賞した。私は、これをもつて江戸の仇を長崎で討つつもりでいたが、2000年6月末に勤務先を退任したのを機に江戸の仇を江戸で討つことを思い立つた。幸いなことに四手井淑子氏の著書（キノコ物語 かもがわ出版、2001）のお陰

**：会報No.26（2006）16頁の記載では、図鑑が出版されてから卒論を執筆したように記述しているが、記憶違いによる誤記である。

で2001年11月4日に松毬に生える3種類のキノコにほぼ半世紀ぶりに京都御苑で再会した。今は仇どころか「菌遊学」を楽しませてもらっている。

関西菌類談話会は、発足当初は専門家が中心で、講演会の演題は菌類全般に亘っており、キノコが際立っていたわけではない。しかし、会合の4割近くを採集会（現在の呼称は観察会）に充てていたこともあって、次第にアマチュアの人たちが増えていった。私は、発会時から1962年3月まで庶務・会計を仰せつかっていて、採集会の頻度が多すぎるといささか不満であった。しかし、

講師難で濱田先生がご友人に講演を依頼され、先生のご指示で講師のお宅に私がお礼の松茸を届けるようなこともあって黙っていた。今になってみると余計なことを言わなくてよかった。

採集会で困ったのは、キノコの同定ができる人は本郷先生と林業試験場関西支場におられた樹病学のご専門の紺谷修治先生のお二人、たまにご参加いただいた京都学芸大学の樹病学の永友勇先生くらいしかおられなかったことである。本郷先生にはキノコ全般の同定でご指導いただき、紺谷先生には特に硬質菌の同定でお世話になった。それから半世紀、今日の会の発展には今昔の感がある



写真1 京都大学農学部付属芦生演習林（現フィールド科学教育研究センター森林ステーション芦生研究林）で開催された第33回談話会（1964年7月21～25日）での本郷先生【この時のエピソードは四手井淑子・四手井綱英著「きのこの手帳」（ナカニシヤ出版、1973）に記されている】



写真2 濱田稔先生の研究フィールドであった京都岩倉の尼吹山に先生を偲んで建立された「松茸の碑」の除幕式で碑に清酒を献じられる本郷先生（1983年10月29日）

が、これはまさにアマチュアを大事にされた濱田先生のご方針のもとでの本郷先生のご指導の賜物であった。

本郷先生が1961年に京都大学から理学博士の学位を受けられた頃だったと思うが、濱田先生は本郷先生を京大理学部植物学科の然るべきポストに推薦されようとしたことがあった。しかし、本郷先生は、ご家庭のご事情を理由にお断りになった。その後の大学紛争や学科再編などはキノコの研究には好ましいことではなかったと思うので、

俗世間のランク付けに囚われることなく、ご自分の研究に適した場をしっかりと見据えておられた先生の態度に深い尊敬の念を覚えた。このような話は、本来、内密にすべきもので、両先生は、黄泉の国で「あいつはまた余計なことを言う」と機嫌を損ねておられるかも知れないが、今回は特別にお許しを請うことにした。先生のご冥福を衷心よりお祈りする。

(2008年9月29日受付)

本郷先生へ

吉 見 一 子

先生のお顔やお姿を目の当たりにしながら、思い出を綴っております。

濱田先生の教室でお目にかかって以来、観察会にはいつもご指導を頂きました。とくに、滋賀大への訪問をお許し頂いたときには、石山寺の駅まで迎えに来て下さり、自転車を押しながら赤土がむき出しの上に建っている木造校舎へ、歩くのもやっとの小さな部屋の中に、ぎっしり詰まった箱詰め様の標本を覗かせて頂き、目を丸くしたものです。

またあるとき、先生とグズマン先生が一緒に来訪され、初めての外国の方のおもてなしに戸惑いましたが、どうにか数時間を歓談頂きました。そのとき、先生が遅くなったことを奥様にお電話

されていたお心遣いのお姿が目に残っています。

三野先生宅でのホンゴス会にも先生が入会のお声をかけて下さり、参加させて頂きましたが、久々のお出合いに嬉しさと安堵で胸の詰まる思いで一杯でございました。

先生宅への折々の心ばかりの心遣いにも、先生はいつも欠かさずお礼の電話を頂き、律儀そのもののお姿に恐縮致しておりました。

先生、本郷先生、いろいろと意義深い人生の綾模様をありがとうございました。いつまでも、私達の心の中に生き続け、励まして下さいます幸せを、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

(2008年9月28日受付)

本郷先生の思い出

村上康明

私は生物が好きだったので生物学科（九州大学）に入学したが、それと同時に生物研究部に入った。「さて部活動で何を研究するか」となったが、同級生にコケに詳しいものやらシダに興味を持っているものがいた。同じ対象では面白くない、また、高等植物にはそれほど興味をひかれない、と考えているうちに子供の時に祖母に連れられて行ったきのこ狩りのことを思い出した。一冊の図鑑を購入したところ、「日本のきのこ研究は遅れており、わかっていないことが多い」と述べられていた。この「わかっていない」という部分に興味をひかれ、「ちょっときのこを見てみようか」と思ったのがきっかけで、その後30年以上もきのこに関わることとなった。その図鑑の著者が本郷次雄先生であった。今と違って回りにきのこ会などもないため、採集したきのこを調べても全くわからない。そこで失礼も顧みずにいきなり先生に手紙を出した。見ず知らずの若造からの手紙であり、返事が来ないことも覚悟していたが、意に反して先生はすぐに返事を下さった。「きのこの分類を勉強するのは大変であるががんばって欲しい」という旨の暖かいお言葉をいただいたことを今でもはっきり憶えている。

大学できのこを学べるところがほとんどない（当時滋賀大学には大学院がなかった）ため、所属する生物学科（生態学）の大学院に行ったが、先生とは関西菌類談話会の観察会や熊本きのこ会でお会いしたり、手紙を出したりと、連絡は常にとり続けていた。1982年には研修で3ヶ月間大学におじゃましたりしたが、きのこを本格的に勉強したいという気持ちはますます強くなり、つ

いに本郷研究室の門をたたいたのが1983年のことであった。研究室では午前中きこの採集に出かけ、午後はスケッチと採集した標本の整理、夜はアルバイトという生活であった。きのこ採集は、芋谷（いもだに）、国分（こくぶん）神社、関津（せきのつ）神社、荒戸（あらと）神社など、大学周辺の色々な場所を先生に案内していただいた。これらの場所は先生が新種のきのこを記載される元となった採集地で、先生の種を直に教えていただけるというのは大変貴重な経験であり、きのこに囲まれた幸せな時間を過ごさせていただいた。その後先生は退官されたので、長沢先生をはじめとした一連の研究生の中で私が最後となったようである。当時のノートをめくってみると、きのこを採集した環境と共に本郷先生のお姿が鮮やかによみがえってくる。なお、文中の学名は主に今関六世・本郷次雄著「原色日本新菌類図鑑」に従った。

1982年8月11日、大津市国分で柄に赤い粒点があって孔口が赤く緑取られたイグチを見つけ、ツブエノウラベニイグチ *Boletus granulopunctatus* Hongo と教えていただいた。印象深いきのことしてスケッチ²⁾が残っている。

1982年8月20日、滋賀大学構内で傘の肉が青色に、柄の肉が赤色に変色するイグチを見つけた。先生に見ていただくと、クロアザアワタケ *Xerocomus nigromaculatus* Hongo とのこと、「傘をこすると黒くなりますよ」と教えていただいた。図鑑に載った本郷先生のスケッチにはこれらの特徴が良く現されている。

1982年8月21日、荒戸神社で全体に黄土色の粉を被って褐色のひだを持つテングタケ属の一

1) この時、生まれて初めて描いた数枚のきのこのスケッチを同封して見ていただいた。その後、本郷先生は折に触れて「村上君はコテコテの絵を描いておられましたな」と笑われていた。そのスケッチの一つがナラタケで、へたではあるが最も印象に残ったもので、今でも大切に持っている。

2) こうしてスケッチした種は、別の機会に見つけた際、たとえ傘の一部だけしかなくても判別できるから不思議である。

種を見つけた。本郷先生も見ることがないと言われる。新種候補として「ヨゴレコナテングタケ」の仮名をつけて観察を続けたが、最近は神社の整備により環境が変わり、発生しなくなったようである。

1982年9月10日、先生と関津神社に出かけた。シイの樹下に傘がうぐいす色の美しいイグチが生えているのを見つけて先生に見ていただくと、ヒメウグイスイグチとのことであった。このきのこは先生のお気に入りのイグチの一つであるように見受けられ、「顕微鏡下で胞子が金色に見えるのですよ」と教えていただいた。また、柄につば様の隆起を持つ、クリイロイグチに似たきのこを見つけた。先生によると、長沢氏が新種記載予定のきのこで、長いシスチジアを持っているとのことであった（のちにクリイロイグチモドキ *Gytoporus longicystidiatus* Nagasawa & Hongo として発表された）。

1982年10月15日、先生と信楽町に出かけた。この日はゴヨウマツの樹下にきのこが群生しており、ヌメリツバイグチ、ワタゲヌメリイグチ、ベニハナイグチ、ゴヨウイグチなどの新鮮な個体を採集することができたので、帰って早速スケッチした。

1983年8月8日、国分のアカマツ・コナラ林で全体かば色の粉を被ったテングタケを見つけた。初めて出会ったが先生に見てもらってもなく、カバイロコナテングタケ *Amanita rufoferruginea* Hongo とわかった。このきのこは、大変印象深いきのことして先生の随筆に登場している。

1983年9月23日、兵庫県宝塚市で淡赤色の傘、バラ色の柄に白い網目を有する美しいイグチを見つけた。先生によると新種に間違いはないだろうとのことであった。一度しか採れなかったのが残念である。

1983年10月18日、信楽で松林を歩いているとベニヤマタケの仲間の美しいきのこが見つかった。帰って先生に見ていただくとヤマヒガサタケ *Hygrocybe subcinnabarina* Hongo とのことであった。

1983年10月30日、京都の清水山で傘と柄の表面に特徴的なささくれを持つフウセンタケの仲

間を採集した。見ていただくとアサクラフウセンタケ *Cortinarius shigaensis* Hongo とのことであった。

1984年9月25日、宝塚市で採集した、傘が褐色で黄色い柄が傷つけるとさらに黄色く変色するイグチを見てもらおうと、サザナミイグチ *Boletus subcinnamomeus* Hongo とのことであった。「サザナミ」という名前を不思議に思って「由来はなんですか？」と聞くと、「琵琶湖のさざなみから命名したのですよ」と笑顔を浮かべながら話された。（失礼ながら）先生にしては珍しく文学的な命名だと感じた。

1984年10月、先生と関津神社に採集に出かけた。きのこを探していると地元の人に声をかけられた。曰く「神社の裏山はマツタケが発生する場所なので、きのこを採ってはいけません!!」。マツタケ泥棒と間違われたわけである。その人は世界的に有名なきのこ学者に話をしていいるとはつゆほども思っていないのだらうが、失礼な話である。しかし本郷先生は黙って話を聞かれ、その場を立ち去ることにされた。私としては不満で、「きのこのこの研究をしている」と話せばわかってくれたのではないかと思ったが、それではやぶ蛇で、先生のとられた行動が正解だったのかもしれない。

1985年9月30日、先生と芋谷に出かけたところ、きのこが大発生していた。ダイダイイグチ、セイタカイグチ、ナガエノウラベニイグチ、アシナガイグチなど多数が見られる中で、シロテングタケ *Amanita neoovoidea* Hongo が完全な菌輪を描いて出ていたのは特に印象的であった。その後芋谷の採集地は道路の開通によって消滅してしまったという。

また、本郷先生を慕って多くの菌学者が研究室を訪問されたので、世界的に著名なきのこ学者とも間近に接することができた。

1982年9月にはアメリカのミラー先生 (Dr. Orson K. Miller Jr.) が奥様と共に滋賀大学を訪問され、しばらく案内役を仰せつかった。京阪バスのバス停で奥さんが「ミラーが・・・」と言われる。ミラー先生がどうかしたのだろうか？といぶかっていると、道路の反対側を指さされた。そこでようやく理解したのだが、「日本はカーブミラーが



写真1 ルリハツタケをスケッチする本郷先生



写真2 シンガー先生と本郷先生(京都市八坂神社にて)

あるので交差点で見やすく良い」と、アメリカにはないとも、LとRを開き分けられなかった自分を恥じると共に、良い思い出になった。一緒にサケバタケを採集する機会があったが、先生は私が写真撮影するのを見て、「あなたが標本を持っておきなさい」と、写真撮影だけではだめで、証拠標本の保存が大事であることを暗に諭されたものである。

1983年8月にはスイスのホラック先生(Dr. E.Horak)が来られた。イッボンシメジ類が得意な先生であるが、標本は1個、2個では役に立たず、3個あって初めて1種であると冗談交じりに話されたのが印象的であった。

1983年9月にはアメリカのシンガー先生(Dr. R.Singer)が来られた。清水山できのご採集をすることになり、本郷先生と共に出かけた。9月とは言っても初旬の暑い盛りで、多くの蚊に悩まされた。そこで、「日本の蚊が“ようこそシンガー先生”と大歓迎していますよ」とジョークを言うとシンガー先生は大喜びされ、「君君、シンガー率って知っているかね？蚊が多い場所ほどきのこも多んだよ」。

同年11月にはイギリスのコーナー先生(Dr. E.J.H.Cornier)が研究室を訪問され、今度は滋賀県大津市から長野県まで列車の旅の案内役を任せられた。コーナー先生は長身でパイプをくわえた姿がよく似合う、「これぞ英国紳士」というお姿の人であった。道中では、私がきのこの分類を研究しているということから、マレーシアの熱帯雨林では菌根性きのこの発生期間が大変短いことなど、ジョークを交えて話してくださったのが印象的であった。奥様も大変お優しい方で、不慣れた案内役の私をねぎらっていた。

研究室では午前又は午後にお茶の時間があり、本郷先生はその休憩時間を大変楽しみにしておられた。横山先生、堀越先生(当時私と一緒に研究生だった)や学生さんと一緒にきのこや菌学会の先生方の話、海外での採集旅行の話など四方山話に花が咲いた。ある時など本郷先生が教授会をサボられ、「会議会議でかなわんですわ」とか言いながら私たちの部屋でお茶を飲みながら話に打ち興じられたのも懐かしい思い出である。

(大分県農林水産研究センターきのこ研究所)

(2008年10月1日 受付)

本郷先生を偲んで

川上 嘉章

滋賀大学で研究生をさせていただくことになったのが昭和53年4月、その時初めて本郷先生にお目にかかりました。最初はいったいどんな先生なのだろうか、たくさん教えていただけるのだろうか、図鑑を書いておられる偉い先生が私のような一研究生に話をしてくださるのだろうかと不安な気持ちばかりでした。初日、狭く薄暗い先生の教官室に入り、自己紹介などをした後で、先生が描かれた美しいキノコの水彩画を見せていただきました。私はほんとうに見とれてしまいました。図鑑では拝見していたのですが、いざ実際原画を見せていただき感激したのです。そこで先生が言われた言葉に愕然としたのを覚えています。「採ってきたキノコの水彩画を描きなさい。覚えるにはそれが一番ですな」と。水彩画など描いたのは小学校の低学年のころか遠い思い出であり、しかも何か苦手なイメージしか残っていませんでした。でもここでこんなことで研究生になるのを止めるわけにはいかなかったので、あきらめて水彩画に挑戦することにしました。それから先生は「面相筆を買いなさい」と聞いたこともないような筆の名前を言われました。それは最も細い筆のことで、キノコを描くのになくってはならないものでした。しかたなく買いました。しばらくは悪戦苦闘でした。でも5月ごろスジオチバタケを描いたころから、自分がこんな絵を描いたのかと思えるものもあるようになりました。1日に2～3種類しか描けませんでした。確かに1日そればかり見ているわけですから、これは覚えないうちがおかしいということに気づきました。結局そうやって2年間描き続けることになりました。

採集場所は滋賀大学のある大津市近辺の三井寺、田上キャンプ場、宇治市、京都市、奈良市等々、先生がご自分の軽自動車を運転され、同乗させていただくこともたびたびでした。韓国へ同行し、生まれて初めてマツタケを見て感激もしました。

大学の4回生にKさんという女子学生がおられ、先生は話をすることを楽しみにしておられました。私がつつ話す間に20ぐらい話されるぐらいでしたが、これまでにない雰囲気を持っておられました。先生のお宅で夕飯をご馳走になることもありましたが、お酒がはいるとますます気さくで親しみやすくなりました。そういう時はいつもKさんのことを話題にされました。



滋賀大学近くの山に学生と一緒にいった時のものです。

採集会では、このキノコは食べられますか、という質問が出ていましたが、先生はいつも「私はキノコを食べるということは興味ないですな」といつも言われていました。また「植物、特に樹木を覚えないうちがいけません。キノコだけ覚えてもいけません。」これは、どんな環境にそのキノコが発生するのかを知らなければいけないというお教えでした。

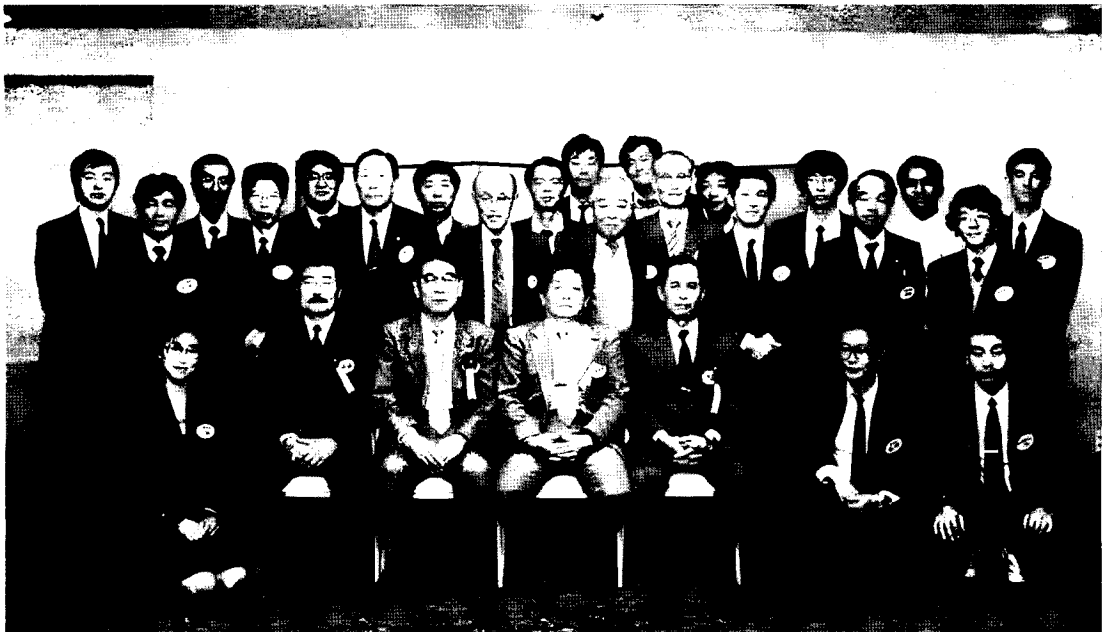
研究生を終え、広島に就職後、アキノアシナガイグチを最初に見つけた時は、今までに無い興奮を覚え、先生に標本を送ったことを覚えていま

す。先生が「お、これは珍菌ですな！」と言われるのを期待して、すると先生は「南方系のキノコで日本では見つかっていなかった種類です。広島で見つかったので“安芸の”という名を入れましょう」ということでした。なんだ、もう記録があるのか、と思いましたが、“安芸の”という名を入れるということで感激もしました。その後、このキノコが日本で初めて広島で見つかったかどうかについて異論があるようですが、それについて私はどうこう言うつもりはありません。でも「安

芸の脚長猪口」と命名された理由は別にあると思っています。それは、先生はお生まれは天津市ですが、広島高等師範学校、広島文理大学を卒業されたということで、広島には特に思い入れが強かったからではないのか、と思うのです。

まだまだ先生には教えていただきたかった。お話をさせていただきたかった。ご冥福をお祈りいたします。

(2008年10月20日受付)



古い写真が出てきました。これは、今から15年以上前に中国・関西地域の府県の菌根きのこ部会の集まりで、その年の退職者の送別会が京都で開かれたときの写真だと思います。赤いリボンをつけておられる4名が退職者です。右から京都府の伊藤さん、森林総合研究所の小川さん、岡山県の下田さん、そして奈良県の山中さんです。本郷先生は2列目中央付近にいらっしゃいます。(衣田雅人)

本郷先生との出会いと「私のきのこ中毒」

上田 俊穂

はじめに私自身のことを書かせていただきますことをお許してください。

私は小さいときから理科に興味を持つ「変わった子」でした。とくに中学生時代には、なぜか化学に強い興味を持つようになりました。当時、京都は小学区制でしたので、私の通う中学校からは普通科は伏見高校と決っていました。いろいろ悩んだ末に普通科へいくことはやめて大学区の洛陽高校（工業化学科）を志望し、卒業後はすぐに就職すると決めました。担任の予想を裏切って合格できましたが、案の定、私は授業についていくのに必死になる必要が生じていました。当然、授業は苦痛でした。

そういうわたしの逃避場所は校内の図書館でした。中学校の「図書室」の比ではない山のような書物、開架式の書庫や大きな閲覧室、図書館専任の先生が居られること等に驚かされました。その図書館に入ると左側にカウンターがあり、その向いにたくさんの辞書や図鑑が並んでいましたが、たくさんの原色図鑑類を見てわくわくしたものです。この場所で私の人生を左右するような一冊の本に出会いました。

書棚の図鑑類を見ていくと、中に保育社の「原色日本菌類図鑑」というのがあったのです。「ん？菌類図鑑って何の図鑑？」と思いながら取り出してながめてみると、そこにはたくさんの色とりどりのきのこが並んでいるではありませんか！世の中にはこんなにいろいろな色・形の、たくさんのきのこがあるのかとすっかり驚きました。それまでは、きのこなんて興味も知識もほとんどありませんでした。父の戦前の百科辞典の中の図版と、母が買ってくれた植物図鑑にある粗末なカラー図版のみが私のきのこの知識の全てでした。

図書館で出会ったその図鑑の中を見た時の驚きと熱い感動は、今でも忘れられません。当然、借りて家でゆっくり見たかったのですが、図鑑類に

は「禁帯出」という赤いラベルが貼ってあり、大変がっかりしました。しかし、ありがたいことに閉館時から次の日の開館前までは貸してもらえることを知り、ほんとに嬉しかったことを思い出します。

私は何度も何度もこの図鑑を借りました。著者は今関六也と本郷次雄という先生で、本郷先生は滋賀大学に勤務されていました。わたしはもともと滋賀県人なので、お目にかかったこともない本郷先生に親しみを覚えました。これが本郷先生との最初の「出会い」でした。

あるとき、この学校には生物部というのがあることを知り、同級生のE君を誘って入部しましたが、私の学習成績はまったく振るわなかったのですが、図書館以外に生物部の活動も加わり、それらは私にとっては別世界のように楽しく、そのお蔭でなんとか毎日通学できたようなものです。

私は、父から本の前書きは必ず読むものだとするさく言い聞かされ、それを純真にも守っていました。その図鑑の前書きも、当然のこととして読みました。

するとそこには日本のきのこの研究は大変遅れていて、名前が判らないきのこがたくさんあること、日本にも多くの菌類の研究者が育ってほしいということなど、驚くようなことが切々と書かれていたのです。また、図鑑に載っているきのこは、多くが著者たちが自ら描いた図であるということでした。私は写真だとばかり思っていたので、本当にびっくりしました。（後にその原図を見せてもらって、その精緻さに、さらに驚かされました）

そのことにおおいに刺激を受けて、すぐさま私もきのこの図を描いて見ました。生物部顧問のM先生は絵画でも有名な方で、なかなかうまいねえなどとほめていただき、大いに励みになりました。私はクラスの最下層を低迷していたのです

が、その図鑑の前書きは「何か僕もやってみよう」という夢を持たせてくれたようでした。

私は日曜日には稲荷神社や東福寺、泉涌寺などへきのこを探りに行っは図鑑と照合して名前を調べていました。当時は今のように青少年を誘惑するいろいろな遊びがない時代でしたし、趣味などに集中する人を馬鹿にする「おたく」なんて言う言葉も風潮もありませんでした。ただ、ちょっと変わっていると、母にはよく言われました。私はこんな面白いことに興味を持たない人こそ変わっているのだと、よく言い返したものです。

顧問のM先生は、きのこに大きな興味を持った私に、京都大学の農学部にはマツタケの研究で有名な濱田稔という先生がおられるので、訪ねて行ってきのこの勉強の仕方を聞いて見なさいと紹介状を書いてくださいました。夏の頃、私は生まれて初めて大学というところを一人で勇気を出して、しかし、おずおずと訪れました。ひんやりとして薄暗く、落ち着いた古い建物の廊下を通り、不安な気持ちで「応用植物学研究室」という札のかかった部屋をノックしました。

濱田先生からはきのこのことだけでなく、さまざまな事柄について高校生私にもわかるように話してくださいました。初めての出会いでしたが、大学の先生から間近にいろいろなことをお聞きして、心から感動しました。また、後日、あの原色菌類図鑑の著者の一人である本郷先生を紹介してくださいました。本郷先生には私が描いたスケッチを見ていただき、伏見の稲荷神社で採った「タマゴテングタケ」と同定したスケッチに、「わたしはまだタマゴテングタケはみたことありません。これはタマゴテングタケではなく *Amanita pseudoporphyria* です」と学名を書いてくださいました。そして、本郷先生にはその後数十年間にわたってきのこのことを教えていただくことになったのです。

高校三年生のある時、「きのこの勉強をするには、何はともあれ大学に入りなさい」と濱田・本郷両先生につよく勧められました。しかし、大学という建物には何度か来ていても、結局は大学なんて自分とは無縁の別の世界だと思っていました。学力的にも経済的にもとうてい無理でした。

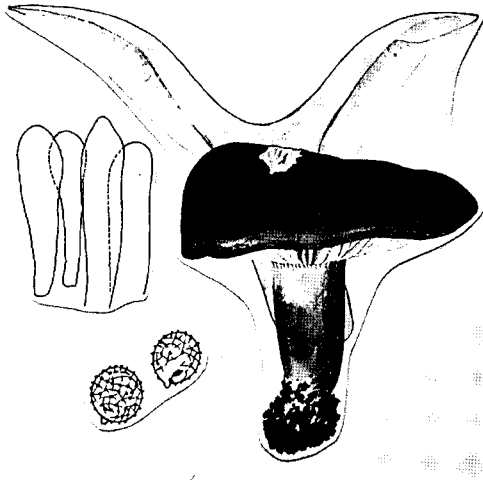
はじめの考えどおり高校卒業後は就職すると決めていて、まもなく神戸税関で働くことになっていました。

しかしそのころ、なぜか今度は叔父や両親が、これからの世の中は大学を出ていたほうがいいと言い出したので、ついにそれまでは全く思いもよらなかった大学進学を決意をしました。一冊の本と三人の先生との出会いと助言があり、一方で叔父の経済的援助という幸運があったのでした。一浪して入ることができた大阪府立大学農学部の三年生の頃でしたか、偶然にも、あの濱田先生の研究室に大学院生として居られた方が、私が学ぶ府立大学の遺伝育種学研究室に来られたのです。その方は衣川堅二郎先生という方で、私はそのとき以来、衣川先生を四人目の師として、きのこだけでなく様々な多くのご指導を受けることになりました。これはまことに幸運でした。

さて、本郷先生が水彩絵の具で描かれたきのこのスケッチを間近に拝見すると、傘表面の鱗片の様子や、ひだとひだの隙間の陰影が非常にたくみに表現されています。最初の頃は、それは絵の具の塗り重ねによって表現されているのだと思い、それを真似ました。しかし、先生は私の描いたスケッチをご覧になって「こてこてのスケッチですなあ。絵の具のつけすぎです。」と笑いながら仰いましたので、以後改めるようにしたものです。

大台ヶ原や京大の芦生演習林での宿泊のきのこ採集会のときなどは、スケッチが夜になっても終らず、先生と机を並べて懐中電灯の明かりで描き続けたこともありました。行き詰って困っている時に、「私が何とかしましょか？」と声をかけてくださいましたが、「いや、頑張ります。」と答えてしまいました。後になって、手伝っていただければよかったと思ったものです。

大学卒業後は定時制高校へ勤務することになり、数年後に大阪から大津の膳所へ引越しました。そのころはしばしば滋賀大学を訪れ、ご指導を仰ぎました。研究生として、もったきのこの勉強したかったのですが、「そんなことしなくても、いつでも来てください。」と仰ってくださいました。



上の図は本郷先生が描かれたニセクロハツの水彩絵の具によるスケッチです。

これは先生がお元気なころ、お宅で写させていただいたものです。ちょっと判りにくいかもしれませんが、ケント紙に描かれたきのこ、シスチザア、胞子のスケッチが切り抜かれて台紙に貼りつけてあります。その理由をお聞きますと、図を動かして都合よく並べやすいからだということでした。

あ、私のきのこ中毒体験の話です。むかし、きのこ仲間三人で産生の京大演習林へきのこ採集に行き、そこで直径20cmほどの大マツタケを一本採りました。それはかなり古く、雨にぬれた以上にぬるぬるしていましたが、「えーい、腐っても松茸！」とばかり、すき焼きに入れて三人で美味しく食べました。が、就寝中腹痛を催し、二人が夜中にはげしい下痢をしました。

もう一つの中毒ですが、すでに述べましたように、高校生のときに出会った一冊の本と高校や大学の先生方にご指導頂き、私の人生の方向を決める大きなヒントもいただき、きのこの勉強をすることができました。就職後は、きのこのことは趣味として続けることにしました。できの悪い教え子で、今ではきのこのつながりは切れかけてい

ますが、何とか細々とつながっています。

またきのこのために本や顕微鏡の「投資」もしました。これら一連の事実は「きのこ中毒」以外のなにものでもありません。幸い命を落とすことはありませんでしたが、「猛毒」だったかもしれません。これが私のきのこ中毒です。

昨今、きのこに興味を持つ人達が増えていますが、最初は「食べられるか毒かを知りたい」という動機の場合が多いようですが、何人かはきのこの魔力に魅せられて、きのこそのものについてもっと知りたいと思われるようになるようです。新たにきのこ中毒にかかる人が発生し始めたということでしょう。

HONGOS会という会があります。HONGOSはスペイン語で菌類とかきのこことかいう意味だそうですが、お判りの様に「本郷」と語呂合わせです。本郷先生がご退職の頃に先生と数名の「きのこ仲間」で立ち上げられました。年に数回集まり、勉強会をし、その後は会食に移行しました。場所は大概先生のお宅でしたが、同会の仲間のお宅や別邸、野外で採集会ということもありました。初めは数名だったメンバーも、先生の優しいお心に魅かれて次第に増え、40名をこえるようになり、回数も66回になりました。先生はこの会合をとでも楽しみにされていたようです。先生が亡くなられてから約一年後、先生のご霊前で第67回の会合を、以前と同じように開催しました。そこでは今後も続けたいという声が多く聞かれました。

図鑑というものは、自然物の無表情な(?)羅列だと思いますが、もし私が本郷先生のあの図鑑に出会わなかったらきのこに興味を持っていたらどうか?、大学へ行っていたらどうか?…と考えると、本の書き手と読み手とが同調した時には、計り知れないような力や情熱を読み手に与えるのではないかと、偉大さと同時に畏怖も感じるので

す。

本郷先生、いろいろお世話になりました。ありがとうございました。

(2008年10月15日受付)

本郷先生と過ごした時間

小林久泰

この度、本郷次雄先生の追悼号を編集させていただく機会を得た。談話会会員の皆様より一足早く、投稿された会員諸氏の玉稿に触れることで、改めて本郷先生が談話会に残された功績の大きさを感じた次第である。またそれは同時に、自分の中に残っている本郷先生との思い出を思い出すきっかけとなった。以下に、簡単ではあるが、紹介したい。

私が本郷先生とよくお話しさせて頂くようになったのは滋賀大学大学院に入学してからである。学部生として通っていた筑波大学を卒業する半年前に滋賀大学に今度大学院ができるという話を聞くことができた。早速試験を受けたところ、幸い合格して、横山和正先生の研究室に所属する院生の一期生として在学した。この時、本郷先生は既に滋賀大を一度退職されていたが、非常勤講師として、週一度大学に通っておられた。先生は授業の前後、よく生物学研究室に顔を出して、学生とよく話をして下さい。他の先生の授業を受けていても、授業の最初に自己紹介で、きのこの研究をやっています、という、前には本郷先生という方がおられて、横山先生とご一緒にきのこの研究をされていたんですよ、と紹介されることもあった。

当時、同級生にアセタケ属を研究しておられる小林孝人さんがいた。本郷先生と孝人さんの話は、私にはとてもレベルが高く、自分の勉強不足を痛感していた。

一方、私は研究テーマとして、菌根の形態的特徴を記載することを掲げていた。このためには、材料として菌根性きのこの菌糸を子実体から植物

の根までたどって、菌根を探し出す必要がある。野外には多種多様な菌根菌が植物の1つの根系と共生しており、きのこの直下とはいえ、他の菌が混ざっていないという保証はどこにもない。菌糸や細根を選び分けて、目的とする菌と植物の組み合わせを浮き上がらせて、菌根の記載をする、というものであった。子実体直下の土壌ブロックを一週間かけて観察することもあった。

そんな私が本郷先生とお話しすることと言えば、この時期なら、どこにいけば、どんなきのこに出会えるのか、といった一般的なきのこ談義であった。本郷先生からの情報が試料採取に大いに役立つことは言うまでもない。いまから思えば、もっときのこの分類についても勉強するよい機会であったのに、という後悔の念がたつが、当時の私にはそれで十分であった。

アカマツコナラ林に生えているきのこの下を掘って、その種がコナラの根にしか菌根をつくっていないことがわかると、樹木ときのこの関係について、お話しさせて頂くこともあった。先生は「菌根を掘ってみた訳でないけれども」と前置きされながら、様々なきのこの話を聞かせて下さった。とても楽しい時間であった。中には菌根共生研究に重要な示唆を含むものがあったと思うが、当時の私にそれを理解できていたとは思えない。

そんな訳で、本郷先生と過ごした時間を、自分なりに振り返ってみたが、きのこの話をされる時の、いつもにこやかな先生のお顔を忘れることはできない。大勢の皆様と一緒に先生のご冥福をお祈りしたい。

(2008年10月16日受付)

学生時代から一生の師である本郷先生

西田 富士夫

私が本郷先生のおられた滋賀大学教育学部に入学したのは昭和44年。その頃は、日本中の大学で学生紛争の嵐が吹き荒れていました。この年は、東大などに代表される大学紛争の激しかった大学での入試が中止されるなど大荒れ状態でありました。滋賀大学の周辺には、よく整備された豊かな里山や田園が開けていました。広くゆったりした大学の構内は、とても自然が豊かで心地良く、人の心はゆったりしていました。そんな環境の中での本郷先生との出会いでした。(入学前には先生の存在は知りませんでした…) 入学1ヵ月後の5月には、この大学にも紛争の波が押し寄せ、全学部ストに突入することになってしまいました。全ての講義がストップし看板があちこちに立ち、何やら拡声器でアジっている先輩学生たちがいっぱいいました。何回となく全学部集会が開かれ、これまでの大学の非民主的な体制をくつがえして民主的で自由な大学をつくりあげようとの運動でした。ストは半年にわたって続いたのですが、その間の約6ヶ月、全学部集会から次の全学部集会までのあいだは、我々一般学生にとって本当にゆったりした時間が与えられたのでした。当時の生物研究室は、下級生(1~3回生)の部屋と上級生(四回生)の卒論研究室がありました。下級生は時々、「どんな研究がされているのか」ととても興味があって、卒論研究室をのぞきに行ったものでした。そこでは、いつも部屋いっぱいに何やら独特の臭いがただよっていました。なんだろう?それは古い電熱器できのこを乾燥させているときの臭いでした。その場には、よく本郷先生が顔をみせられ、きのこの話や高等植物の話の花が咲いていました。私も、採集した植物を持って行って先生にみてもらったり、図鑑をひく練習をする機会がどんどん増えていきました。

時間がうまく合ったときには「西田君、ちょっと採集に行こうか!」と誘って下さり、先生愛用

のスバル360に乗せてもらって近くの山へ連れて行ってもらいました。この車は、結構馬力があって、小回りが効くので、狭い山道を通って採集地に行くにはちょうど良かったのだと思います。スバル360とは、フォルクスワーゲン社の有名なカブトムシ型の車に対して、小さなテントウムシの愛称をもつ軽四輪車のことです。また、当時の生物研究室棟の前にはいつもこの車が駐車してあり、この車があるかないかで本郷先生が外出中なのか部屋におられるかが分ったものでした。おかげで、何種類かのきのこの区別はつくようになりましたが、残念なことに、当時の私はあまりきのこに関心がわきませんでした。綺麗な花が咲く野草や山中に見られる樹木など、もっぱら高等植物に関心がむかっていってそちらのほうの採集をしたものでした。でも、本郷先生はいつも「私は専門でないからあまり知らんのですよ」と言いながら、高等植物の図鑑のひき方や種の特徴や見分け方のポイントを教えて下さり、当時の私は「何でもすごくよく知っておられる先生だなあ」と本当に感心したものでした。そのおかげもあって私はますます高等植物に愛着をもっていったのでした。

2回生になって、初めて先生の授業を受けましたが、授業中に野外へ出かけたり、試験には実物をみて植物名を答える問題もあったりで、いかにも専門課程らしいユニークな授業をして下さったものでした。当時の『生物学概論』のノートをもっています。38年たった今でも大切に残してあります。図1は、そのノートの「担子菌類のセックス」のページです。

採集に当たって、本郷先生がいつも言っておられたことは「遠くへ出かける必要はないのですよ。遠くより近くを徹底的に調べなさい」と言う持論です。調べる材料は身近にいくらでもある。調べるための時間をより大切にきなさいよ、とい

う教えだと思っています。4回生の時には、先生にお願いして有志でゼミを開きました。快く引き受けてくださって1冊の本(図2)を紹介していただきました。英文を訳してきて、本郷先生に見てもらおうというものでした。数名の学生のために貴重な時間を割いて下さったのだなあと後になって感じたものでした。

大学生の生活も終わりに近づき、卒業を間近に控えた最後の冬、私は自動車免許を取るために瀬田(先生のお住まいの近く)にある自動車教習所へ通うことになりました。何と、そのことを耳にされた先生は、わざわざトヨタの高級車(クラウ

ン)に乗って学校に来られ、「西田君、自動車学校に通ってるんだろ!この車でちょっと練習してごらん」と、車の助手席に乗って下さって、学内の自動車試験場の類似コースを見つけては「それじゃここのS字コースに入ってごらん。そこで、バックで車庫入れしてごらん!」などと運転の指導までして下さいました。体が震えんばかりの感動で、とても嬉しかったのを覚えています。おかげで1度の失敗もなく合格できたのでした。本当に暖かい心配りで、今でも時々思い出すと同時に、私もそう言う心配りのできる人物になろうと心がけています。

さて、大学卒業後、私はキノコに関係する道へ進まないで某大学の雑草学研究室へ進学しました。あるとき、読んでいた論文の中にどうしても意味がわからず訳せない英単語に出あいました。辞書をもても載ってない、いろんな先生に聞いても明確な答が得られないで困っていました。たまたま滋賀大学へ行く機会があって本郷先生に聞いてみましたところ、即、その場で明解な答が返ってきました。長い間の疑問がスッと解けました。「なんと偉大な人だろう!」とまたまた感心すると同時に難解なものが解明したときの喜びを胸に持って帰ったのでした。

大学院終了後は大阪の府立高校の生物の教師になりました。縁あってまた、滋賀県で植物観察会を継続することになり、各地へ出かけるようになりました。そうしているうち、だんだんキノコの魅力に取り付かれ、「ああ!本郷先生がいらっしやったらなあ」と思う機会が増えてきました。沢山キノコが採集できたときには、「先生のところへ聞きに行ってもよいですか?」と電話すると、「いいですよ。いつでもいらっしやい」との返事。卒業後も大変お世話になりました。

1989年に、先生は滋賀大学を定年退官なさいました。そのときには、卒業生を中心に関係者による退官記念事業が行われ、私は、光栄にも記念祝賀会の司会をさせていただくことになりました。お亡くなりになった今もこれからも、私の人生の師として生き続けられています。

(2008年10月31日受付)

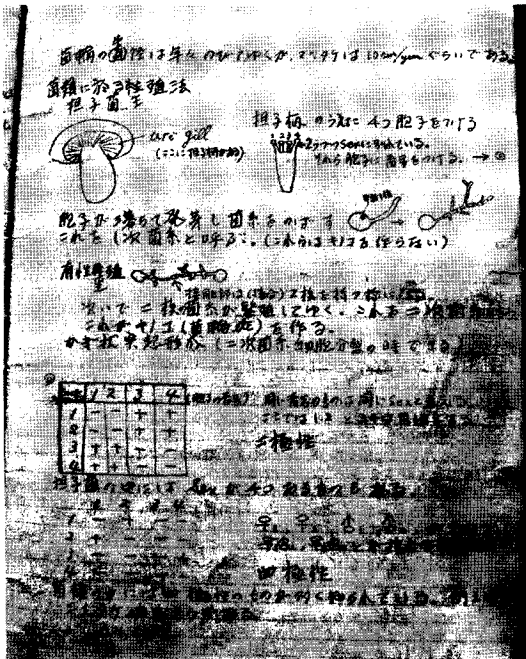


図1 ノート 担子菌類のセックス のページ

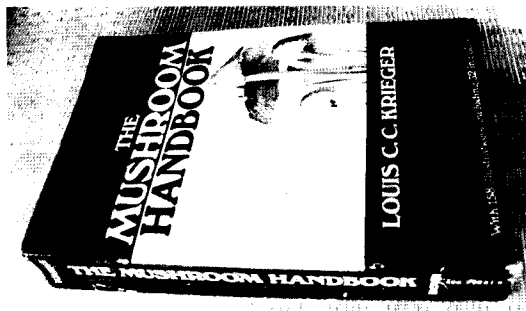


図2 ゼミで使用した一冊の本

本郷先生との出会い

橋 屋 誠

最初、本郷先生は恐い先生だと思っていました。本郷先生にお会いする以前の話です。

私は中学時代には昆虫類の特にチョウチョを、高校時代には地学の鉱物・化石に興味を持って京都近辺の山を歩いていました。ある日、中学の恩師に「生物部の後輩できのこに興味をもっている生徒がいるのだが、君が山へ行く時に連れて行ってくれないか？」と頼まれたのです。生物部でわるさをしても庇っていただいた恩師の頼みですので「いや」とは言えません。何度か中学生の彼といっしょに山を歩きました。

彼のリュックにはいつも保育社の菌類図鑑2冊が入っており、彼はきのこを見つけるとやうやしく図鑑を取り出してページを開くのです。そして神様のように尊敬している本郷次雄先生と今関六也先生の話をしてくれました。初め私はまったくきのこに興味がなく、ていねいな説明を聞いても「へえ～」とうわのそらでしたが、ユーモラスな形をしたホコリタケやスッポンタケと出会っているうちに、きのこも面白い生き物だなあと思いはじめました。そこで教員を目指していた私は、自分の進路と興味の2つを同時に満たすために本郷先生のおられた滋賀大学教育学部を志望しました。そんな時、山と溪谷社のカラー自然ガイドの「きのこ」を本屋で見つけ購入しました。この本は私が最初に自分で買ったきのこの本になります。そして毎日飽かずにこの本を開いては、きのこの絵を眺めたり、書かれている種の紹介文を繰り返し読みました。特に自宅近くのシイ・カシ林に見られるというヘビキノコモドキというきのこは、白黒の斑模様で描かれており、とても印象的で「いつかきつとこのきのこを採ってやるぞ!」と思っていました。

この本の後には著者の紹介があり、本郷先生と今関先生のモノクロ写真が載っています。初めて見た本郷先生の写真は光の具合もあるのですが、ものすごく神経質そうで、すぐにでも怒られそうに見えました。本郷先生の上にある今関先生の写真はにこ

やかであったため、いっそう本郷先生が恐く見えたのでしょう。私のまわりに、「博士」とか「教授」の方がいなかったせいかもしれませんが、大学の先生は高校までの先生と違ってものすごく恐いだろうという妄想を私自身が作り上げていました。

念願が叶い、滋賀大学での入学式の後は、理科の新入生は各研究室へ配属されます。私は希望通り生物研究室への配属が決まり、次は先輩に連れられて研究室で先輩や先生方との対面式です。私は緊張していました。ところが恐いと思っていた本郷先生は表情も優しく、いつもの「え～、…」との口調で私たち新入生を暖かく迎えるお話をしてくれました。これで私の緊張も解けましたが、この時は学部を卒業してもなお、永く本郷先生のお世話になるとは思いもよりませんでした。かれこれ30年前、私が19歳の春でした。

現在勤めている富山県には、きのこの分類をされる方がほとんどなく、秋になると植物園へ多くの県民がきのこの食毒を尋ねに来られます。私がきのこの同定をさせていただけるのも、学部時代に本郷先生が同定されるのを傍で見せていただいていたからに他なりません。私の学部時代、滋賀大学には研究生として、川上さんと河村さん、金さん、村上さんがおられ、研究生の方は、午前中に採集したきのこを午後にスケッチや顕微鏡での観察をされていました。本郷先生も午後には2階の自室から降りて来られ、1階の実験室で研究生の方々が採ったきのこについて丁寧な説明をされていました。私はこれが楽しみで、午後の授業はよくサボって聞かせていただきましたが、あの時に教えていただいた事が、今の富山での仕事にとっても役立っています。最後にもう一つ、先生は夏の暑い日に自宅で漬けられた梅酒を持って来られたことがあり、私もお相伴させていただきましたが、あの味が今も忘れられません。

(2008年11月14日受付)

本郷先生の教育法

伊 沢 正 名

近頃私の撮る写真は、もっぱらウンコ、それも野糞に関連したものばかりだ。具体的には、上に埋めたウンコを分解する動物や菌類、分解されて上に還った無機養分を吸収する植物、それらによって変貌するウンコの様子や、尻を拭く葉っぱ等々。そんな中で、この秋には63点の調査野糞中46点、じつに7割以上の野糞跡に発生したアシナガヌメリとバフンヒトヨタケを写した。実情を知らない人には、伊沢はとんでもない変質をした、と思われるかもしれない。しかしこれは、キノコの本质(有機物を腐らせることの意義)から学んだことを、ヒト本来の生き方に反映させるための方策だと私は考えている。

さて、キノコや変形菌、コケなどを専門に写真活動をしてきた私だが、キノコ写真家として認められるようになった陰には、多くの研究者の導きがあった。まず初めに、キノコによる有機物分解(枯れ木や落ち葉などが腐って上に還る)があってこそ自然が成立するという、今関六也先生の『生態系自然観』を知ったことが、私がキノコの世界に入るきっかけだった。そして私の写真が広く世間に認められるだけのレベルに達したのは、ひとえに本郷先生の教育法に触れたためである。

1978年春の菌学会大会では、今関先生から本郷先生を紹介していただき、その後の菌学会フォーラムなどでご指導いただいた。そして1980年9月には、多くのキノコ写真と段ボール箱いっぱいの標本を持って滋賀大を訪ね、先生のお宅に泊めていただいた。明るい縁側で写真と標本を見ていただいた時の情景は、今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。

先生は、写真はじっくり見て検討して下さったものの、標本の方はチラッと見られただけで、すぐに標本袋を閉じてしまわれた。研究者なのだから、標本こそじっくり調べて名前を付けてくださるものと思っていただけに、私は期待を裏切られて啞然と

した。当然のごとく、不明写真の多くに名前は付かなかった。しかしこれこそが、先生の愛の鞭だった。

標本を顕鏡すれば、多くのキノコに名前が付いただろう。しかし、その特徴をしっかりと捉えていない写真に、一体どれほどの価値があるのか。表現手段としての写真には、標本に頼ったり、ましてや標本至上主義などを持ち込んではいけなかったのだ。写真そのものが十分にキノコを語っていなければならないことを、言葉ではなく、目の前の行動で示して下さったのだ。

1987年秋、幼菌の会朝日の森合宿でのこと、名前がわからないフウセンタケを写した。その夜、合宿所に現れた本郷先生に、少し傷んだそのキノコを見ていただいたが、やっぱり種類はわからない。ところが後日、ベストコンディションで写した写真を見てもらおうと、即座に「これはフタイロフウセンタケです」という答えが返ってきた。私の写真が、先生の求めるレベルに到達したことを実感できた、うれしい瞬間だった。そして1988年秋、今関先生や本郷先生などの下で山溪カラー名鑑『日本のきのこ』を作り上げ、自信をつけた私はプロカメラマンを宣言した。

今関先生は1991年に、そして本郷先生も昨年亡くなられた。敬愛する先生方にこれ以上の教えを請えなくなったのは残念だが、私の中には悲しみよりも、大きな感謝が息づいている。キノコによる分解から学んだように、死は単なる終わりなどではなく、腐って大地を養い、新たな命を誕生させる、再生へのスタートだ。先生から学んだことを一つでも多く、少しでも大きく、受け継ぎ受け渡していくこと。これこそ、先生の心を永遠に生かすことであり、キノコの生き方でもあると、私は信じている。

本郷次雄先生、本当にありがとうございました。

<糞土師(元自然写真家)>

(2008年11月19日受付)

『日本のきのこ』誕生前夜と本郷次雄先生

香川 長 生

「本郷先生、このたび、わが社で山溪カラー名鑑シリーズの1冊として、写真による大図鑑『日本のきのこ』（以下、写真図鑑と略称する）を刊行したいと思います。今関六也先生には、監修と硬質菌のご執筆をお願いしてあります。先生にも、ぜひ監修と軟らかいきのこのご執筆をお願いしたいのです。写真は、伊沢正名さんが今まで撮りためた写真をすべて提供して下さることになっています。約1000種を600頁に収めます。そのため、どうしても写真スペースが多くなり、記載文スペースはあまり多くは取れませんをお願いしますでしょうか？」「写真と頁数が多いからといって、大図鑑といえるかな？大図鑑というなら記載文もしっかりしていないとね」今関先生にいわれたことが、ちらちらと脳裏をよぎるのを覚えながら、私は、本郷先生に監修と執筆をお願いしたのだった。

ちょうど先生は、保育社の「原色日本新菌類図鑑」全2巻（以下、原色図鑑と略称する）の記載文原稿のご執筆で多忙な日々を過ごされていた。

「伊沢さんの写真には、きのこが生えている環境など、絵による原色図鑑にはない、いろいろな情報が撮りこまれています。世の中には、あまり芳しくない写真図鑑が多すぎるので、私も、貴社のその写真図鑑を応援します。伊沢さんの写真なら、きのこの世界のおもしろさやロマンすらもアピールできる1級の写真図鑑ができると思います。解説の足りないところは、原色図鑑が補えばいいんです。心ある読者なら、写真図鑑も原色図鑑も同時に買って一緒に見てくださいよ」私の抱いていた今までの不安を見すかすかのように、先生は力強くおっしゃった。そして、子のう菌類を

ご専門とする大谷吉雄先生をはじめ、腹菌類の吉見昭一先生、きのこの毒性研究の横山和正先生、コウヤクタケ分類の前川二郎先生、キクラゲ分類の青木孝之先生らに、分担執筆をお願いして下さった。

それから一年半後の9月、刊行をきのこシーズンに突入するひと月前の8月上旬と設定していたにも関わらず、人校作業が遅れに遅れて編集室は七転八倒の大騒ぎ。このままでは刊行は10月下旬、きのこのシーズンもそろそろ終わりのころになるかという状況だった。急きよ営業会議が招集され、初版を1刷と2刷に分けることによって書店への搬入量を抑えるという方針が立てられた。600頁オールカラーといっても定価4500円は大金、売れ残って大量返品されるのを恐れていたことだった。そしてようやく11月寸前に刊行、配本。ところが発売と同時に、書店から追加注文の電話が、連日、鳴ること鳴ること。1刷の2万部が即売り切れ、予備の2刷1万部を供出し、もうきのこのシーズンは終わっている12月だというのに、さらに3刷1万部を増刷するという大ブレイクが起きたのだった。

そのころ、本郷先生は、ちょうど大学を定年退職されたばかりで、北海道から九州まで各地のきのこの会の観察会の講師としてどんどん足を運ばれ、八面六臂の大活躍だった。同時に全国にきのこの大ブームが起きた。換言すれば写真図鑑と原色図鑑の同時刊行に情熱を注がれた本郷先生が、御白らの足で起こされたブームだった。ありがたいことに写真図鑑は、翌年以降現在に至るまで、どんどん増刷を重ねたのであった。

＜山と溪谷社OB 元自然科学部門編集長＞
(2008年11月27日受付)

本郷先生との出会い

山手万知子

1985年頃だったと思いますが、私はきのこに関心を持ち始め、日本菌学会に入会して学会主催の採集会に参加しました。そこできのこの同定をされている本郷先生にお会いしました。そのとき、本郷先生は偉い先生と教えられました。それで、同定されるお姿をつかず離れず拝見させていただきました。

1986年、勤務先の大学で創立100周年を記念して、大学周辺の国有林の牛田山（広島市）の自然を調査記録する計画が立てられ、きのこに対して全くの初心者な私は、凶らずもきのこ担当となりました。そこで、きのこ本気で取り組むこととなり、見様見真似で牛田山のきのこの採集・観察記録・標本作りを始めました。ところで、これら標本を誰に見ていただくかと思案しましたが、本郷先生には恐れ多い気がして、菌学会で本郷先生と一緒に同定されていた長沢先生に、面識もないのに諸事情を手紙に書いてお送りしたところ、快く引き受けて下さいました。そして、長沢先生とのご縁でホンゴス会に参加させていただき、本郷先生に直接お会いしました。お会いしてみると、本郷先生はざっくばらんで初心者の私を快く受け入れて下さり、来るものは拒まずといった懐の深い先生でした。それから、関西菌類談話会に入会させていただき、また広島きのこ同好会にも入会しました。

広島きのこ同好会は山田なばの会と合同で採集観察会を年1回開催し、本郷先生をお迎えして講演と同定をお願いしていました。ある年、来広された折、本郷先生と二人できのこ、それもアキノアシナガイグチを求めて最初に国内で発見された山に入ったことがありました。本郷先生は、ま

だ発生している現場を観たことがない、そしてスケッチもしていないと仰っていました。アキノアシナガイグチには少し遅い時期でしたが、1時間余り探してようやく1本を見つけました。そのときの本郷先生はとても嬉しそうで、丁寧に採集されいつも持ち歩いておられる買い物籠の上に大事に納められました。その足で広島駅までお送りしました。先生は天津に帰られてすぐスケッチされたそうです。後日、そのスケッチを見せていただきました。

1990年代に入って、私も県内のきのこ採集会に同定のために出かけるようになりました。ここではきのこを持って来られる方は、一様に「このきのこは食べられますか？ 毒ですか？」と問われます。それで、本郷先生とお話したとき、私は生意気にも「先生、きのこは二つの名前があれば同定できますね。一つは食用、もう一つは不食、この二つで充分満足しておられます」と言いました。本郷先生は「そうですね。一般の人は食べることに執着され、名前や特徴には関心がないようですね。私は反対に食べることには余り興味がないのです。いつかバカマツタケご飯を食べたとき、臭いがきつくて閉口しました」と言われました。私も同感でしたので、先生と同じだと思うと嬉しい気分でした。ただし、私はまだバカマツタケを観察する機会に恵まれておりません。マツタケとどのくらいの差があるのか、いつかお目にかかりたいきのこの一つです。

本郷先生との思い出はつきませんが、まだまだ大御所でいらって欲しかった思いです。

本郷先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(2008年12月5日受付)

恩師本郷先生を偲んで

長澤 栄史

2007年4月の桜の花の咲く頃、本郷次雄先生は浄土へと旅立たれた。それから2つのきのこのシーズンが過ぎ、はや2年近くが経とうとしている。しかし、私には未だその実感が無い。

私と本郷先生の最初の出会いは、縁あって現在の職場に勤めてから1ヶ月余り経った昭和47年の10月であった。既に故人となられた今関六世先生（当時先生は菌叢研究所の顧問）のお供をして、広島の帝釈峠で開かれるきのこの採集会に出かける途中の列車の中でのことである。「長澤君ですか、本郷です」という言葉が、先生からかけて頂いた最初の言葉と記憶している。次にお会いしたのは翌48年の7月であったが、それから次の年の3月まで約一年間、滋賀大学に内地留学させていただき、先生の下で本格的なきのこの勉強をさせていただいた。このときの経験や先生から教わった事柄は、今でも私の仕事の基本となっている。

滋賀大で勉強を始めて大変驚いたのは、参考書やテキストを用いたいわゆる“講義”による指導がないことであった。きのこシーズン中は、午前中先生と一緒に近くの林で採集、実験室に帰ってから採集したきのこの名前を教えていただき、その後は時間の許す限り採集品を水彩画でスケッチし、形態的な特徴や発生場所等の情報をノートに記録する、というのが大体の日課であった。用事で先生がご一緒できないときは自分で採集し、採集品をスケッチし、後で先生に見ていただいた。きのこの発生がない冬季は、乾燥しておいた標本を顕微鏡で観察し、胞子や担子器などを線画でスケッチした。最初の頃は、毎日きのこの絵ばかり描いていてこれできのこの勉強になるのか心配であった。しかし日が経ち、先生から教わったきのこの種類が増え、スケッチした絵がたまってくると、それまで本で読んでいて中々理解できなかった種や属、科といった分類群の特徴が徐々に理解

できるようになってきた。そして、その時期になって初めて、先生の指導法というものが如何なるものであるかということに気が付いたのである。

きのこの種のレベルの分類や同定においては、重要な形質として子実体の肉眼的特徴が大きな比重を占めているが、この特徴は顕微鏡的特徴と比較して客観的にデータ化することが中々難しい。そして、これはきのこの分類や同定を「難しい」と言わしめている大きな要因になっている。1つの種類の子実体が発生環境や時期、場所によってどのように変化するかを知らなければ、種の特徴をつかむことは難しく、従って未知のきのこを分類したり同定したりすることはできない。学生時代多少の勉強をしていたとは言え、きのこについてほとんど初心者同然であった私にとって絵を描くという作業は、基本となる種の特徴を勉強する上でこの上なく役立つように思われる。当時は1つの絵を描くのに、形や色が単純で簡単なものでも1～2時間程度、イグチ類やテングタケ類の大型なものでは3～4時間程度要したが、その間はいやでもきのこを見続けていなければならなかった。絵を描くという作業は、対象をじっくりと観察する作業でもあり、苦勞して覚えた種類は何時までも記憶に残る。このようにして先生の下で描いた絵は約200枚、種類にして180種程であった。今改めてその当時の絵を見ると、稚拙なものばかりであるが、先生にご指導いただきながら共にすごした日々が大変懐かしい思い出となってよみがえってくる。本当に貴重な時間であった。

きつとまた、先生にお会いできる日が何時かやってくるに違いないが、その時にお見せできる絵を何とか描いておきたいものと思っている。

< (財) 日本きのこセンター菌叢研究所 >

(2008年12月9日受付)

〈編集後記〉

本郷先生がお亡くなりになったのは2007年4月ですが、ようやく追悼号を発行することができました。多くの方から原稿をいただき、先生の偉大さを感じます。

私は1974年10月に奈良県に採用され、翌年の7月に林業試験場（現 森林技術センター）できのこ栽培技術の研究を担当するようになりました。しかし、私はきのこに関する知識は皆無でした。そのため、職場の先輩に勧められて関西菌類談話会に入会し、きのこ観察会に参加するようになりました。その頃、中国・関西地区の府県のきのこ担当者が集まり、菌根菌きのこの共同研究をしていました。その集まりに本郷先生をお招きし、アカマツ林に発生するきのこについて教わりました。その当時の仲間が、烏越茂氏や藤田博美氏、太田明氏、川上嘉章氏達です（P20の写真を参照）。私達はそれぞれの調査で、名前の分からないきのこがあると、その名前を教わるため、写真を撮って先生に見ていただくのですが、その写真が問題でした。きのこの特徴をとらえていない写真では、名前をつけようもなく、先生の注意を受けます。きのこの名前を教わるには、まず自分なりに調べ、その特徴を示す写真を数枚撮り、要領よく説明することが必要でした。

さて、この追悼号の編集は、昨年5月に編集委員会を立ち上げ、私を含め上田俊穂氏、川上嘉章氏、小林久泰氏、西田富士夫氏、橋屋誠氏、村上康明氏、森本繁雄氏が携わりました。会員の皆様には、本会報を通して本郷先生を偲んでいただければ幸いです。

関西菌類談話会 会長 衣田雅人

関西菌類談話会会報 No.27 (本郷次雄先生追悼号)

2009年1月31日発行

編集委員長：衣田雅人

編集委員：上田俊穂、川上嘉章、小林久泰、西田富士夫
橋屋 誠、村上康明、森本繁雄 (50音順)

発行：関西菌類談話会

事務局：〒612-0879 京都市伏見区深草西出町 25-4
森本繁雄方

印刷：株式会社 アイプリコム

〒636-0246 奈良県磯城郡田原本町千代 360-1